関東学院
学院史資料室
ニューズ・レター

No.10
2007.4

目次

学院史資料室写真集 9 …… 1
『125年史』編纂等の企画 …… 2
関東学院史料展（第 2 回） 展示史料の紹介 …… 3
学院史資料の紹介 …… 7
資料・情報提供のお願い …… 8
編集後記 …… 8

学院史資料室写真集 9 ・中学本館　1929（昭和 4 ）年

1929（昭和 4 ）年に中学本館の献堂式が行われた。

1929年から現在まで、三春台校地（横浜市南区三春台）において、校舎として使用されている。関東学院内に現存する最も古い建物であり、1992（平成 4 ）年 2 月に横浜市の歴史的建造物に認定された。

設計はＪ.Ｈ.モーガン（Morgan）。モーガン設計の建物は、横浜山手聖公会をはじめ、横浜市認定歴史的建造物に多く残されている。また、港の見える丘公園内にある「山手111番館（旧ラフィン邸）」（同じくモーガン設計）は横浜市指定文化財となっている。

横浜大空襲に耐え、長い歴史を刻み、今なお生き続けている中学本館は、関東学院史資料の最たるものと言える。

（参考資料：『この丘に立って　関東学院中学校高等学校80年史』、『都市の記憶　横浜の主要歴史的建造物（改訂第 3 版）』）

「125年史」編纂等の企画

学院史編纂委員会

「学院史編纂委員会」は、「関東学院創立125周年記念事業委員会」の下にある三つの委員会の一つとして、昨年２月に構成された。その構成員は、学院長（委員長）、総務担当常務理事、学院宗教主任、学院史資料室長、図書館本館運営課長から成る。この委員会の事業目的は「学院史の編纂と学院資料展示室の開設」であり、その進捗状況は下記の通りである。

（１）「125年史」の編纂

本学院では、各校毎の学校史は多々出版されているが、学院全体史の出版物は意外と少ない。その事例としては、①『関東学院小史』（1954年）、②『関東学院歴史と現況』（1961年）及びそれに基づいた③『関東学院50年の歩み』（1969年）、そして④『関東学院百年史』（1984年）及び⑤『関東学院100年 1884-1984』（1984年）に限られる。

これらのうち、①、②、③は文字通り「関東学院」の歴史であり、それ以前の神学校や東京学院の歴史は前史としてしか位置づけられていない。③が「50年の歩み」とされた所以である。また、②、③、⑤は写真が中心である。この間、1966年に横浜バプテスト神学校（1884年）から起算して80年を超えたために、「開学80年記念式典」が盛大に挙行された。これが大きな契機となって、関東学院創立の起点を1884年に設定する流れが定着してきた。その結果、③の執筆責任者が中心となって④『百年史』が刊行されたのである。

この『百年史』の刊行は本学院にとって画期的な事業であった。それは、1884年を起点とする学院史の最初の刊行物であるだけでなく、その詳細さと包括性を兼ね備えて資料価値も多大だからである。ただし、若干、未調整な部分も残り、また、読者側からすると、分厚すぎて近づき難い感もあるようだ。そのような事情もあって、「120年史」の企画も立てられ、それが「125年史」編纂の企画に引き継がれることとなった。

（文中③）

（文中⑤）

その企画の概要は次のとおりである。ⅰ）『百年史』の中の詳細な前史部分を省略し、神学校を起点とする「三つの源流」の記述を出発点とする。ⅱ）戦後史の中の施設関係の記述も極力省略する。ⅲ）各学校毎の記述様式を統一する。ⅳ）廃止された組織の記述よりは将来を展望しうる内容に重点を置く。ⅴ）正確かつ客観的な記述に努め、反省点などの評価は他日を期する。ⅵ）直近の25年史を含め全体として『百年史』の約３分の１（タテ書き300頁余）に圧縮する。ⅶ）配布対象は教職員中心とし、内容も平易を旨とし、研修用テキストとしても使えるものとする。ⅷ）執筆は、創立から直近の法人・大学までは編纂委員会が中心となり、戦後の各校については、すでに各校長から執筆者が推薦されているが、年表を含め全体として編纂委員会が調整する。ⅸ）出版は関東学院大学出版会からとする、などである。

（２）「関東学院の源流」（仮称）の刊行

これまで『関東学院学報』に連載されてきた「源流を探る」シリーズが間もなく完結するので、これを刊行し、「自校史」等の開講科目のテキストとしても使えるようにする。

（３）学院資料展示室の開設

125周年を期して資料の収集を計画的に進め、それまでに随時、資料展示会を開催し、恒久的な展示室の開設可能性を探っていく。そのため、昨秋には「Ａ．Ａ．ベネットと坂田祐」、今冬には「建学の精神と奉仕活動　―国際交流―」の展示会を、各々数週間にわたり大学フォーサイト１階で行った。今後、各校でも行う予定である。

（４）年表の標準化

年表の記載に不備なケースがあるので、とりあえず学院ホームページの「沿革」の記載を記念事業委員会の議を経て補正した。今後「125年史」に向けて、可能な限り年表の標準化を進めていくこととする。

関東学院史料展(第２回)
展示史料の紹介

「第２回 建学の精神と奉仕教育活動―国際交流(理解と共生)―」
2007年１月17日から２月14日まで開催
於：関東学院大学 Foresight21エントランスロビー

1992～1994年　カレン族ティワタ村
六浦小学校教員・保護者による支援活動

食前の賛美をする寮生

薪を拾い歩く親子

1995～1998年　カレン族ティワタ村
六浦小学校教員・保護者による支援活動

厨房の無い頃の
調理風景

生きるために雨水を貯めて使う

1999年度　カレン族モゴキ村
文学部国際交流プログラムによる支援活動

モゴキ村の親子

モゴキ村の子ども

ハーモニカを寮生に配布

寮生による夕拝

奥地にある寮生の実家

村人に届けた古着

2000年度　カレン族ワソタ村　文学部国際交流による支援活動

文学部生による
ワソタ村教会堂建設

2003年２月　カレン族ティワタ村　文学部国際交流プログラムによる支援活動

木で作られた橋を補強

ティワタ村新教会堂建設現場

研修の合間の川での水浴び

2003年８月　カレン族ティワタ村　六浦小学校第１回タイ訪問団（カレンバプテスト同盟ファイナムカオ教会子ども寮）

参加者歯科医による検診

子ども寮俯瞰見取り図

参加者親子による活動

第１回タイ訪問団参加者

毎回支援物資を届けます

女子寮献堂式

2004年３月　カレン族ティワタ村　文学部比較文化学科　ワールドスタディⅡによる支援活動

奥地へ移動する学生たち

40℃を超える暑さの中で

さあ、塗るぞぉ！

孤児院「希望の家」にて

バンコク市内
スラム街保育園での実習

2005年２月　アカ族ボン村　文学部比較文化学科　ワールドスタディⅡによる支援活動

セメントもこねました！

献堂式での献金

アカ族教会幹部との会議

食後の楽しいひと時

ガスも水道も電気もありません

村人とバケツリレーです

2004年８月　カレン族ティワタ村　六浦小学校第２回タイ訪問団およびボランティアグループΣソサエティによる支援活動

大学生と小学生が一緒に活動しました

小学校制服姿の寮生と

寮生と楽しい夜のひと時

骨組みだけは出来ました

2005年12月　六浦小学校チャペルとチェンマイ市内カレンバプテスト同盟会議室を回線で結ぶ合同クリスマス（大学キリスト教と文化研究所主催）

2006年２月　アカ族ホイコム村　文学部比較文化学科　ワールドスタディⅡによる支援活動

学生による夕拝での賛美

額に汗が滴ります

教会堂建設真っ最中

建設工事終了

2006年８月　六浦小学校第４回タイ訪問団および人間環境学部学生による支援活動

人間環境学部生と六小の生徒たち

2006年12月　関東学院サービスラーニングセンター献堂式および六浦小学校第５回タイ訪問団による支援活動

関東学院サービスラーニングセンター

寮長手作りの看板です

大学院工学研究科
建築学専攻生設計

ソムタック寮長とダウ牧師

献堂式参加者全員集合

献堂式関東学院参加者一同

寮長・校長・学院長・牧師

2007年２月　アカ族ドイチャン村　公認ボランティアグループΣソサエティによる支援活動

2007年度
アカ族教会堂建設現場

（以上　監修：森島牧人、勘田義治）

タイとの国際交流年表

1992年２月（平成４）	大里英二（元六浦中高教員）・エミ（文学部卒業生）宣教師が日本バプテスト海外伝道協会からタイに派遣される。 タイの古都チェンマイから300キロ離れた山岳地のチパレ地方、カレン族のティワタ村に、カレンバプテスト同盟のダウ牧師が家から学校が遠くて通えない子のために子供寮を作る。
1994年（平成６）	大里宣教師からティワタ村の子供寮の運営のために六浦小学校に支援の要請が来る。教員２名と父兄１名がティワタ村訪問。支援活動を開始。
2000年３月（平成12）	文学部の国際交流プログラムとして、教員、学生、現地スタッフの13名でタイを訪問し、カレン族と交流し、２時間離れた泉からモゴキ村に水道を敷設する。
2001年２月（平成13）	文学部国際交流プログラムの学生と教師がカレン族のワソタ村で雨季のシェルターを兼ねた教会堂の建設に参加。
2001年（平成13）	六浦小学校で児童議会の呼びかけにより古着を集め、その売上金と父母会からの献金を教師が現地に赴きダウ牧師に手渡す。
2001年10月（平成13）	大学「キリスト教と文化研究所」開設。「奉仕教育における課題と実践」の研究プロジェクト設置。
2002年（平成14）	六浦小学校児童会に「チパレ委員会」を設置し、支援体制を強化する。児童、卒業生、父母会からの献金によってティワタ村に新しい子供寮の建設を計画。
2003年２月（平成15）	文学部国際交流プログラムとして３回目のカレン族へのボランティア活動としてティワタ村で新教会堂の建設に参加。
2003年４月（平成15）	タイの少数民族への国際ボランティア活動が文学部比較文化学科「ワールドスタディⅡ」として正規の科目となる。
2003年８月（平成15）	六浦小学校の献金でティワタ村に女子寮完成。献堂式にあわせ児童を含めた「第１回タイ訪問団」が訪問。
2004年３月（平成16）	文学部比較文化学科「ワールドスタディ」受講の学生が教師とともにカレン族と交流、異文化体験。
2004年８月（平成16）	六浦小学校第２回タイ訪問団（児童、保護者、卒業生、教員及び児童サポートメンバーの文学部比較文化学科の学生と建築学専攻の大学院生の総勢29名）がティワタ村を訪問。六浦小学校父母の指導による万華鏡作りの工作教室、歯科医師による歯科検診、院生による新築寮等の補修・補強調査等を行う。
2005年２月（平成17）	文学部比較文化学科「ワールドスタディ」の授業でチェンマイ山岳民族（アカ族）の支援開始。
2005年12月（平成17）	キリスト教と文化研究所の企画でタイ山岳少数民族の児童と六浦小学校児童を国際専用回線で結び、映像と音声を同時に双方でやり取りしながら合同クリスマスを行う。 人間環境学部第３回国際交流研修として教員と学生５名がティワタ村での交流プログラムに参加。
2006年８月（平成18）	人間環境学部海外交流事業として９名の学生と教師が六浦小学校関係者と一緒にティワタ村で研修と奉仕活動を行う。
2006年10月（平成18）	六浦小学校のタイでのボランティア活動のビデオが外務省主催の「第３回開発教育／国際理解教育コンクール」の映像部門に入選。
2006年12月（平成18）	ティワタ村に「関東学院サービスラーニングセンター」完成。献堂式に学院関係者多数参加、完成を祝う。

（背景写真は史料展示風景）

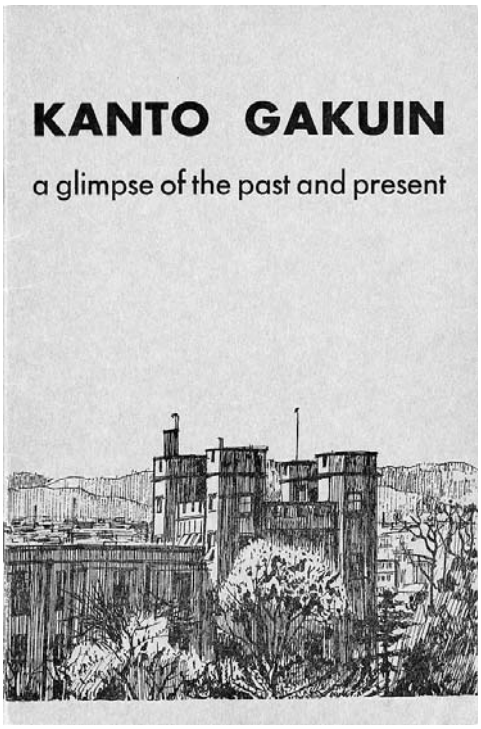
学院史資料の紹介

経済学部教授・学院宗教主任　高野 進

『KANTO GAKUIN
—a glimpse of the past and present—
関東学院　歴史と現況』

発行所 関東学院（1961年）

本書は関東学院史料編集委員会（代表山本太郎）が編集者となっている。「坂田院長の指導の下に、厳密なる史料選択を行い、伊藤卓二と筆者が本文を執筆した」と山本太郎氏が後記で記している。この小冊子が作られた背景をまず見ておきたい。実は1954年に『関東学院小史』が発行されていた。今回はそれを全面的に書き改めたという。それに現況を示す写真を多く加えた。英文解説も加えられた。これは日本文の翻訳ではない。当時、中学高校で英語を教えていたN. A. オーバリー氏が担当した。



後記の中に本書をまとめた動機が見られる。

「学院は近来急激に発展し、一大学園となりつつあるが、その発展を喜ぶとともに、常に建学の真の精神が何であるかを忘れぬ様に心せねばならないと思う。創立当初の学院には勿論何の誇るべき建物もなく、伝統もなかった。あったのは唯、信仰に裏付けられたる教育愛を如何にして生徒たちの心に生かさんかと云う灼熱の使命感のみであった。幾度かの災害に遭い、折角の営々たる努力を烏有（ウユウ）に帰する毎に、その使命感は新たに燃え上って、遂に今日にまで至ったのであるが、世俗的繁栄は必ずしも我学院の求むべき道ではない。如何に建物が立派になってもキリスト教教育の使命を喪失しては、吾々のすべての営みは空しいものとなるのである。吾々は外形的発展と共に益々謙遜に建学の精神を体得して、それを生きん事を願う者である。」

本書には、目次がないが、見出しを紹介しよう。「関東学院創立まで」、「関東学院創立当時」、「中学部第一回生の卒業」、「大関東学院の出発」、「戦争による破壊と再建」、「関東学院の現況」、年譜「関東学院の沿革」。

「関東学院創立まで」には、「我が学院が今日あるのは、唯学院の単独の力によるのではない。その前の時代につながる歴史に導かれた恩恵の多くあった事を忘れてはならない」と記している。「恩恵」とは、歴代の功労者たちの恩にとどめてはならない。彼らを動かした絶対者なる歴史の主の恩恵のことを認識して、感謝し、さらにこのおかたに忠実な歩みを続けていかなければならない。

次に日本におけるバプテスト教会の教育事業の変遷をたどっている。本書では、その源流を1853年７月に、ジョナサン・ゴーブルがペリー提督の東洋艦隊の水兵として日本の土を踏み、日本宣教を志したことに見る。７年後に彼は神学教育を受けて再び来日した。1873年になって、ネイサン・ブラウンとジョナサン・ゴーブルは横浜に来て本格的宣教と教育の事業を開始した。

「中学部第一回生の卒業」では、1924年３月10日に行われた第一回卒業式が、大震災から克服できず、捜真女学校講堂を会場にして行われたことを記す。その時の坂田祐学院長の訓辞は、次のようなものであった。「貧乏になってもよい、この世の事業に失敗してもよい、人生観の基礎を確立して価値ある生涯を送らん事を淳々と説かれ、真の人、真の奉仕者こそ、人生の真の勇者である事を強調し、若き卒業生の魂をゆすぶられた。」「人になれ、奉仕せよ」の校訓を入学式においてはじめて訓辞された第一回の卒業生は、そこで震災にも負けず希望と喜びにあふれていたが、一生忘れることのできないもう一つの訓辞を与えられたことになる。

◘「テンネー礼拝堂（旧小講堂）」

（2006年８月上旬撮影）

（2004年10月９日撮影）

テンネー礼拝堂は表紙を飾った中学本館の３階（塔の下）にある。

「テンネー礼拝堂」と呼ぶようになったのは、割と最近で1997（平成９）年４月１日からである。それまでは、「小講堂」と呼ばれていたが、戦前から礼拝堂として使用されている。

テンネー博士（C.B.Tenny）は、アメリカン・バプテスト・ミッショナリー・ユニオンの宣教師として来日し、関東学院の礎を築いた。テンネー博士が作詞作曲した「College Song」は現在も歌われているし、2004（平成16）年竣工の金沢八景キャンパス１号館のガラスデザインにはテンネー博士による「A New Gate and Roadway」を用いる等、テンネー博士は今なお関東学院で息づいている。テンネー博士については、『関東学院学報』に連載されている「学院の源流を探る　4」（『同学報 第12号』1996年９月発行）に詳しいので参照されたい。

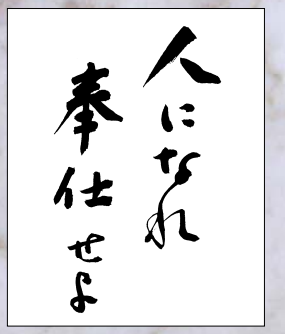
資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。

【前号の掲載記事について】

『学院史資料室ニューズ・レター』第９号９頁上から３番目の写真「初期の六浦校地」は、1952（昭和27）年以降に撮影したものであることを付記いたします。



関東学院　校訓

編集後記

◆中学本館はＪ.Ｈ.モーガンの代表作のひとつにあげられています。1999年にモーガンの自邸が藤沢で発見され保存のために、日本ナショナルトラストによる募金活動がなされ、それに伴い、モーガンの作品の評価が高まってきています。◇第２回史料展では奉仕教育活動を国際交流の場で実践しているタイでのボランティア活動を取り上げました。学院全体が参加しているこの活動によって、水道の敷設、教会堂・子供寮等が建設されました。この活動に参加した児童、保護者、学生、教職員は、物質的な豊かさと便利さに溢れている日本で失いかけている生来人間の持っている生命の息吹のようなものを与えられ、共生の意味を体感して帰国しています。2006年12月にティワタ村に「関東学院サービスラーニングセンター」が完成し、さらなる活動が期待できます。（三浦）◆「学院史資料の紹介」で取り上げられた『KANTO GAKUIN　a glimpse of the past and present』は、1961年に発行後、1964年４月に改訂版、1965年８月に三訂版が出ています。（それらは、大学図書館と学院史資料室にあります。）◇第２回史料展の展示写真は勘田義治氏（大学キリスト教と文化研究所客員研究員）から提供されました。史料展にご協力いただきました皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。（菊池）

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニューズ・レター　第10号　発行日 2007(平成19)年４月27日

発行人　関東学院 学院長 森島牧人
編　集　関東学院 学院史資料室
〒236-8501　横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL.045-786-7066　FAX.045-786-2932
（学院史資料室は Foresight21の７階に移転し、上記のとおり Fax 番号が変わりました。）

環境に配慮して
R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています
2007.4.27.2000